星

岡本かの子

晴れた秋の夜は星の瞬きが、いつもより、ずつとヴイヴイツトである。殊に月の無い夜は星の光が一層燦然として美しい。それ等の星々をぢつと凝視してゐると、光の強い大きな星は段々とこちらに向つて動いて来るやうな気がして怖いやうだ。事実太洋を航海してゐるとき闇夜の海上の彼方から一点の光がこちらに向つて近づいて来る。何であらうと一心にそれを見守つてゐると、突然その光の下に黒々とした山のやうな巨船の姿を見出してびつくりしたことがある。星を見詰めてゐると何か判らない巨大なものがその星を乗せてこちらに迫つて来るやうな気がする時もある。さうい

ふ錯覚は一種の恐怖に似て神秘的な楽しさでもある。

星の瞬きは太古から人間にいろ〳〵な暗示や空想を与へてゐる。星によつて人間の運勢を占ふといふことは、古来、東西共通に行はれたことで、たとへそれに、科学的根拠があるにしても、そも〳〵の初めは太古の人間が、星辰の運行にいろ〳〵の神秘的な意味を持たせ、それを人間の生活に結びつけて来たものである。星が常に何事かを下界に向けて信号し続けてゐるやうに明滅したり、時期によつて地球から見る人の眼にその位置を変へたり、鼓豆虫（みずすまし）のやうにすい〳〵と天空を流れたり、時には孔雀の尾のやうに長い尾を引く慧星

が現はれたりすることなどは、すべて動くものに生命を見出した太古の人にとつては、星もまた一つの生きものであつたと思はれたらしい。私達でも星をぢつと見詰めてゐると、星が生きもののやうな気がして来る。

エジプト、アラビヤ、印度、などの乾燥した土地では、天体を非常に近く感ずる。それは空中の湿度が低いため星辰の光が一層燦然と輝くからであるといふ。それだけに、それ等の土地の太古の住民は、天体の運行に興味を持ち、恰度漁師が風と雲によつて天候を予知するやうに、星辰を観測することによつて、何彼と生活上の便宜を得た。さういふわけで、占星術の如き

も、ヱジプト、アラビア、印度等に、一番古く発達したのであつた。

私は、渡欧の船中、印度洋で眺めた南十字星の美しさは、いつまでも忘れ難い。コバルト色に深く澄み渡つた南の空に、大粒の宝玉のやうに燦々と光り輝く十字星は、天空一ぱいに散乱する群星を圧してゐた。スエズで一たん船を降りて、夜中自動車でヱジプトの首都カイロに向つた時、荒漠たるアラビヤ砂漠の中で眺めた星も亦美しかつた。印度洋上と云ひ、アラビヤ砂漠の中と云ひ、私は星を仰ぎ見る度に古代の人の心に立ち帰つて見るのであつた。今日のやうに、機械の発

達しない太古の人達は印度洋やアラビヤ砂漠を往来するのに星を唯一の羅針とした。昔も今も変りなく燦然と輝くあの南十字星がそんな役割を勤めたかと思ふと、ただ単に美しいと鑑賞するだけでは済まないやうにさへ思ふ。

ヱヂプトでは、紀元前四千二百四十一年に既に暦が存在したといふ。そして当時の埃及人が一年を三百六十五日に分けてゐたことも亦、一つの驚異に値することである。かうした事実は、古代埃及人の天体の運行に関する智識から生れたものであつて、テーベ（ナイル河の上流の古都）にある紀元前千三百年頃のヱジプ

ト王セテイ一世の墳墓の天井には星座の図が描いてあるのを見ても判る。更に、セテイ一世より五十年許り後のラムセス二世の墓にも星を描いた壁画がある。この二つの絵を見ると星は人間や鳥獣を以て象徴されて居て、それらの鳥獣も頸から下は人間の体をしてゐる。そして一番偉い星は天狼星で、これは完全な人間の姿をもつて現はされ、王冠を戴き笏を手にしてゐる。面白いことには群星は素足でゐるが、主立つた星は古代埃及独特の独木舟に乗つてゐる。

古代埃及人は、地球の裏には魔者の住んでゐる暗黒の大海があつて、太陽は東から西へと一日の行程が終

ると、この地球の裏の魔海を夜間舟で渡つて、翌朝までにまた元の東に帰るのだと信じてゐたといふから察するに星も亦太陽と同様に、舟で暗黒の海を渡ると考へられたのかも知れない。星を鳥獣で象徴したのは、鷹を太陽の化身と考へたのと同じ意味からかも知れない。

満天に散在する星の一群を綴り合せて、いろいろな形を想像して出来たのが星座である。星座は人間の詩的空想の産物であつて、いかに沢山の星が天にあるからと云つても、それらが精密な物体を型造る程沢山あるわけではなく、いくつか点在する星と星との間に人

間が勝手な空想の線を描いて、あるものは白鳥を象り、あるものは獅子に象つたりしたのである。従つて星座の数も造らうと思へばいくらでも際限なく出来た筈で、十九世紀頃には知られてゐるものだけでも百九十の多きに達したといふ。それが段々整理されて現在では八十八星座が公認されてゐる。古代から伝はる星座の名称を調べて見ると、昔の星座の名の方が何となく詩的で、例へばその中には、牛飼ひ、冠、琴、白鳥、乙女、といふやうなロマンチツクなものから、狼、大熊、小熊、海蛇、などの怖ろしい動物に見立てたものまであるが、十八世紀以後の星座名は、八分儀、定規、望遠

鏡、軽気球、竜骨等機械が多いのは、文明の変遷が人間の空想の範囲にまで侵入してゐて面白い。

私は、エジプトに旅をした時、一夜、首都カイロから自動車でギゼーのピラミツドを訪れた。それは恰度日本の秋を思はせるやうな涼しい星月夜であつた。駱駝に乗つてピラミツドの周辺を逍遥しての帰るさ立寄つたホテルの露台の籐椅子にもたれて私は埃及の空に輝く星々を心ゆくまで眺めることが出来た。日本などでは到底肉眼では見ることの出来ない星が小さいながらもはつきり輝いてゐる。黒々と屹立するピラミツドの頂点辺りに一際大きく光つてゐたのは古代埃及人が

一番尊敬した天狼星でもあらうか。エヂプトでは四年に一度天狼星が日の出と同時に現はれるので、かうした天文現象の文献が古代埃及の年代を計算する一助となつてゐるといふことである。

私は埃及の星空を眺め乍ら、私の知つてゐる限りの星座の名を想ひ出して、それを探し求めた。しかし、星座図が手元になかつたのではつきり見極めがつかなかつたが、どうやらそれらしいものをいくつか発見することは出来た。だがそれよりも私は自分で星と星との間に勝手な線を描いて、自分の好むままの空想図を組み立てて見ることの方が一層楽しかつた。東京の留

守宅の半面図を描くことも、日本からヱジプトまで来た私の足跡を地図に描くことも出来た。
星を眺めてゐると、星と語つた古代人の稚純な気持ちが、自分にも見出されるやうな気がする。
秋の晴れた夜、私は星と語りによく家の屋上に昇つて行く。北の空には柄杓のかたちをした北斗七星がその柄杓の柄を東に向けて横たはつてゐる。それと少し離れて北極星が一際鮮やかに輝いてゐる。他の星が悉く夜毎に少しづつ位置を変へて行くのに北極星だけはいつも同じ位置にゐる。地軸の北端の真上にある北極星は小熊星座の主星である。この星座の形が小熊を聯

想させるとは私にはどうしても受取れないが、小熊といふ名はいかにも北極の星らしく、その光質までが白光を帯びてゐるやうである。

北極星を眺めてゐると、海辺から帰る鵜烏が一羽、二羽、淋しい啼声をたてながら星空をかすめ去る。地上には薄の穂が夜目にも白く風に靡いてゐる——秋の夜の星空は四季を通じて一ばん私たちに親しく懐しく感ぜられる。

底本：「日本の名随筆　別巻16　星座」作品社
１９９２（平成４）年６月25日第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集　第14巻」冬樹社
１９７７（昭和52）年５月
入力：葵
校正：土屋隆
２００６年5月3日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。